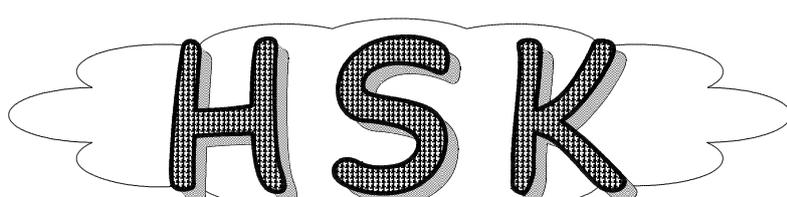


一九九四年八月四日 第三種郵便物認可

HSK 毎月十二回 (一・三・五・八・十・十三・十五・十八・二十・二十三・二十五・二十八日) 発行



季刊わたぼうし

NO. 79
'08秋

シリーズ
本田 雄志さんと語る I

今回の目次

※シリーズ・本田雄志さんと語る I	2
出席者	
・本田 雄志 (ほんだ たけし) 氏	
・西村 正悦 (にしむら まさよし) 氏	
・川崎 節子 (かわさき せつこ) 氏	
・嶋田 三穂 (しまだ みほ) 氏	
・桶屋 善一 (おけや ぜんいち)	
※青山彩光苑障害者週間イベント2008の案内	9
※みんなの広場	
・車いすで治療してくれる歯科	平井 誠一 10
・福祉日記9 「差別と法律」	悪徳福祉評論家 10
・「食べ物談話」食べ物さんありがとう	秋本 信子 12
※向とき子さんを偲んで	
・「HSK季刊わたぼうし」の 表紙の水墨画を描き続けて	13
・故向とき子さんへの追悼	神野 錦子 14
・向とき子さんの作品集	15
※マイ・ブックスルーム	
・手足のしびれ、歩きにくい症状がある方に	16



この機関紙は障がいのある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

シリーズ 本田 雄志さんと語る I

～郵便屋さんで障がい者福祉の世界へ～

【目的】

全く福祉の世界に関係のなかった人が、郵便局を定年まで2年あまり残して退職し、精神障がい者の世界へ飛び込んだ男性の人生を紹介する。

【開催までの経緯】

本田さんと出会ったのは、2年前に地域活動支援センター「ワークショップ野の花」の利用者・職員の方が「青山彩光苑」へ出前喫茶に毎月一回来られたことがきっかけです。その後、本田さんを紹介され交流が始まりました。

2006年10月から七尾駅前第二地区市街地再開発ビル「ミナ・クル」のバリアフリー体験に参加させていただき、七尾市長との懇談会など、いろいろと交流させていただきました。

先日、ある食事会で本田さんの歩んで来られた話を聞かせていただき、皆さんに紹介したいと思いこの企画をしました。

【語る内容】

- ・何が郵便局を退職して障がい者福祉の世界へ飛び込むきっかけになったか？
- ・精神障がいの方々と出会って苦勞すること、楽しかったこと。
- ・障がい者自立支援法になってから、利用者の方々の負担は多くなったと思いますが、生活にどのような影響がありますか？

【日時】 2008年5月17日(土)11時～

【場所】 「麺の華」(七尾市生駒町)

【出席者】

- ・特定非営利活動法人「野の花」理事長
NPO法人野の花
地域活動支援センター「ゆうの丘」施設長
本田 雄志氏 (ほんだ たけし)
- ・「青山彩光苑」総務管理部長
西村 正悦氏(にしむら まさよし)
- ・「青山彩光苑福祉ホームセレーナ青山」在任
川崎 節子氏(かわさき せつこ)
- ・「HSK季刊わたぼうし」読者
嶋田 三穂氏(しまだ みほ)
- ・「HSK季刊わたぼうし」編集委員
桶屋 善一(おけや ぜんいち)

【企画・主催】

「HSK季刊わたぼうし」編集委員会



地域活動支援センターI型「ゆうの丘」の概要

1. 設置場所

七尾市矢田町ミ81番地2
(旧七尾商業高等学校同窓会館)

2. 運営主体

特定非営利活動法人 野の花
(理事長・本田 雄志)

3. 施設の概要

平成19年度自立支援基盤事業により、旧七尾商業高等学校同窓会館を改修したもの。

地域活動支援センター「ワークショップ野の花」(精神)及び「ハウスにこここ」(知的)が合併し、平成20年4月1日開設。
(平成20年4月21日事業開始)

- ・構造：鉄筋コンクリート3階建て。
- ・整備内容：障がい者トイレの設置、階段手摺の設置、スロープの設置などの施設のバリアフリー化、生産活動(アルミ缶プレス)のプレハブハウス設置など。

4. 活動目的

地域に生活する障がい者が、活動を通して自分らしい生き方を見つけるために集う活動

の場です。就労を目指し軽作業を行ったり、仲間と過ごすことで楽しみを見つけたり、地域で過ごすために必要なことを身につけたり等、個々の目的に応じて支援を行っています。

また、当事者を支える家族等の支援や相談、そして地域に出向くことにより地域住民の理解や交流につなげ、障がい者の社会参加を目指します。

5. 活動内容

(1) 生産活動

- ・内職作業(菓子箱折り、ハーネス等)
- ・自主製品(クッキー、パウンドケーキ製造販売、小物等)
- ・アルミ缶回収プレス
- ・清掃作業(公園、庭園等)
- ・出前喫茶(障がい者施設)等

(2) 創作活動

手話・絵画・太鼓・調理各教室
「ふれあい農園」等

(3) ボランティア活動

- ・高齢者施設、障がい者施設、地域(町内・公民館)の清掃活動



作業室2



作業室1



休憩室



食堂



相談室



作業室3



ゆうの丘建物全体



アルミ缶作業小屋

本田雄志氏と語る I ～郵便屋さんが障がい者福祉の世界へ～

対談の開始↓

桶屋：まず自己紹介からお願いします。私は今回この懇談会を企画しました「H S K 季刊わたぼうし」編集責任者の桶屋善一です。よろしくお願いします。この懇談会を1月から企画しまして、やっと今日、実現しました。

川崎：桶屋さんの小さい時からの友だちです。川崎です。よろしくお願いします。

本田：この案内の紙に「野の花」所長になっていますが、4月1日から知的障がい者の施設と合併して「ゆうの丘(七尾市矢田町)」の理事長と施設長を兼ねている本田雄志(ほんだたけし)と申します。今年で6年目になります。

嶋田：郵便局の職員を？



桶屋：その後のお話は、あとでゆっくりお伺いすることにします。



桶屋・西村氏・川崎氏・本田氏

嶋田：私の友人でAさんという人がこの春、転職されたのですが、「知的障がい者通所授産施設」をご存知ですよね。

本田：名前だけ。

嶋田：羽咋から来ました嶋田三穂と言います。桶屋さんの友だちです。時々青山彩光苑へ顔を出したりします。音訳ボランティアなどをしていました。羽咋市にボランティアセンターが開所されたとき、先ほどの友人Aさんに教えられながら、いろんなボランティア活動をやってきました。

今日は黒衣で桶屋さんのアシスタントで来ました。よろしくお願いします。

西村：障がい者との出会いは27～8年前でした。羽咋の方々との出会いが最初ですね。その頃私は建築関連の仕事をしていました。

「青山彩光苑」との関わりは昭和59年頃から工事業者として出入りをしたのがきっかけです。昭和55年ぐらいから障がい者の方とお付き合いが始まり、その時に偏見も何もなく普通にお付き合いをしていました。ただ障がい者の人たちが大変なのだ、ということがその頃は全然わかりませんでした。

その後ご縁があって「彩光苑」に入職し、桶屋さんたちと出会いました。それから12年ぐらい経ちましたが、あまり障がい者という実感はありませんでしたね。

今後も障がいを持った方々に対して、普通にお付き合いをさせていただきたいと思っています。



本田：私は最初、「野の花(精神障がい者小規模作業所・七尾市藤橋町)」でボランティアをしていたのですが、メリットもあるし、デメリットもあります。ちょっと、最初いろいろ言われて「ムーン」と来たけれど、地域福祉・障がい者福祉といたら、デメリットがあるからやめるわけにいかないでしょう。地域で支えてあげることが普通の考え方でないだろうか？と私は思ったのです。ちょっと怒りもあったけれど、私はそう考えています。

障がいの違いは当然あって当たり前なのです。どうすればよいかと迷ったけれど、基本的に人間として同じだ。いろんなハンディがあっても人間として一緒だから。ただそれだけが基本で、やるしかないのでは。

嶋田：どんな現場になるのかな？何人ぐらいの方がおいでになりますか？

本田：知的障がい者の方は10人、精神障がい者の方が30人。

嶋田：羽咋市にも「リヴ」という精神障がい者と知的障がい者の通所授産施設「あおぞら」があります。

本田：西村さん、「野の花」はどうですか？

西村：合併してから初めて「青山彩光苑」で喫茶の雰囲気を見たのですが、当然精神の方々は以前と変わっていないし、知的の方々は動きがわからないので、少し手間取っているところがあったようです。特に問題は感じませんでした。まだ最初なので評価は出来ませんが。

嶋田：「野の花」と「ニコニコ」が合併され

たのですか？ どうしてそうなったのですか？ 別々では出来なかったの？



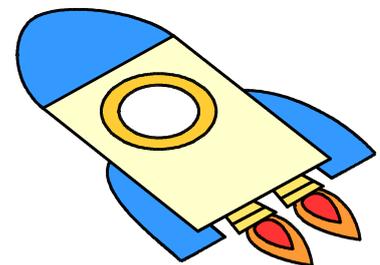
ゆうの丘喫茶・青山彩光苑

本田：「地域活動支援センター」というものは、10万都市なら良いけれど、6万都市であまりにも多すぎたのです。5カ所あるわけです。

そうだから言うわけではないけれど、私は小さい施設、小規模作業所のような施設がこれからの自立支援法の下で果たして本当に経営的に運営が出来るのかどうか不安です。

「地域活動支援センター」は市町村の委託事業ですが、財政的なことを考えると、七尾は石川県の夕張と言っても良いくらいですから……。

嶋田：羽咋も同じです。七尾よりちょっと良いくらいかな。



本田：福祉というものは、高齢者でも障がい者でも、当然そうなのですが、本来、国や県とか市が責任を持つべきことなので、これが本当の政治ではないかと思えます。それを放っておいて負担ばかりさせることが、今の政治のあり方だと思えます。それは大体間違っていると思えます。

現実を考えたら、果たしてこれから小規模作業所として存続していけるかと考えたら、まず出来ない。そういうところから小規模同士でやっていこうという話が持ち上がってきたのです。

嶋田：はあ、そういうところから……。羽咋市のリヴさんも大変でした。そうかといって、「あおぞら」と「リヴ」が一緒になることは想像はつきませんね。もっと違う選択肢はないのかなと思ったのですが。

本田：だからデメリットということを、みんな考えているのではなかろうか？

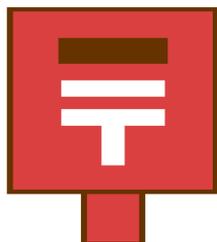
嶋田：「人間として」という視野に立って、理念を貫くということであればそうなんでしょうが、当事者に本当にいろいろありますから。

本田：重度の方がおいでるのですか？

嶋田：おいでます。

本田：そんなら大変ですね。

嶋田：たまに「あおぞらの喫茶」にお茶を飲みに行った時でも、大変だと思う場面が時々あります。何でパニックになるのだろうか？と理由を探すのも大変です。何か理由があるのだろうかけれどね。



Q. 1 何が郵便局を退職して障がい者福祉の世界へ飛び込むのになったのですか？

本田：私の知人で自ら命を絶ってしまうという悲しい出来事があり、当時の仕事が手がつかず、自問自答しながら自分の無力さに気づき、退職後は福祉の道を考えていましたので、少し早くなったという感じです。

嶋田：それで何か、関わろうと思ったのですか？

本田：そして「メンタルヘルス」のボランティア講座を受けたのです。なんか郵便局だけ仕事をしていても、力になってあげられないと思って。講座を受けて、実習で精神センターへ行って精神の方と直接出会った時に、この人らは本当の人間なのだと思います。「本当の人間」というと、皆さん方を人間でないという、そんな意味ではなく「純粹なだけだ」そういう人と出会ったということです。

それから家族と出会って、その家族が夏に「野の花へ来てくれないか？」と言われ、それなら年明けに郵便局を辞めるということにしました。

嶋田：それでも「野の花」に職員として、入られたのですか？

本田：はい、そうです。何もわからないうちに。だけど郵便局へ行きながら時間休を取って、1時から3時までの2時間ぐらい精神センターのボランティアに行っていました。まずやはり精神の方と直接関わりを持たないと、

いい加減に返事をして「はい、わかりました」というわけにはいかないし。

それで今もずーっと続いて7年目になり、精神センターのボランティアを継続中です。そこのボランティアをやっているうちに、西村さんと出会ったのです。

嶋田：今お話を聞いていて、自分の友人のことになりますが、彼女は学童保育に関わっていました。そこで発達障がいの子供たちを初めて知り、こんな微妙で大変な障がいがあるのかとびっくりしたそうです。2日目にその子がパニックになって大変だったそうです。でも、そこから始まる彼との関わりのなかで、人間同志の信頼関係の中で、どんな障がいがあるだろうともスムーズに行くのだと友人は話してくれました。



ハーネス作業

本田：私は資格も何もありません。だから「人間対人間の」それしかない、思うのですが。

嶋田：短いお話の中で、いつもAさんが事業所においでるときに、「障がい」というのはすべての問題を含んでいる、子供などの問題もと言っていました。今、話を聞いていて「人間として」という言葉と、関わり・交流・体験、そういう一緒に視点で行ってきたのだと思いました。

本田：私、この二人(川崎・桶屋)と出会って、すごいな、偉いな、と思います。僕はこんなことができるかな、と思ったら、できないと思います。くじけてしまいます。だからすごい先生だと思います。

嶋田：今、お話を聞いたら、生まれた時からこういう世界しか知らないから、「不便でない」とおっしゃるのですが。

川崎：例えばみんなに「不便さ」と聞かれてもわからない。反対に普通の人に「不便って何？」と聞きたいくらいの面もあります。



作業風景

本田：精神の方は朝、昼、晩、寝る前の4回も薬を飲んでます。我々が飲んだら死んでしまいます。それに副作用を抑える薬を飲んで、たくさん飲んでおられます。やっぱり、それに耐えられることはすごいことだと思っ てみんなに言うのです。私らが飲んだら死んでしまいます。「君らが飲んでそれに耐えられる、すごい力を持っているから」仕事は何でも出来るのじゃないか、ということで話をしているのですけれど。

だから、私自身もやっぱり、2年目にうつ病になりました。

嶋田：「野の花」に入られて?

本田：はい。それで10キロやせて、一日1時間か2時間しか眠れなくなりました。T病院へ用事があって、「野の花」の利用者に病院のデイ・ケアの所へ顔を出して来たのです。

「久しぶりやね」と話していて、「弱った。1ヶ月で10キロやせたわね、眠れないし。」と言ったら、その人は「今、先生の所へ連絡してあるし、行っておいで」と言われ、道路を挟んで向こう側の病院へ行きました。

デイ・ケアの看護師さんがすぐ連絡してくれたのです。保険証を持っていなかったの、あとで送ってもらうことにしました。病院へ行ったら先生が玄関まで迎えに来てくれました。先生が「軽いうつ病にかかっていますね」と言われました。私はうつ病とわからなかったのです。

1ヶ月、ご飯も食べられませんでした。自分はやはりここで倒れたらいかな、という気持ちもあるので。

嶋田：頑張っていたのですね。



青山喫茶：「ゆうの丘」の製品、展示・販売

本田：頑張ることが余計にダメなのです。それも初めて自分で体験して、眠れない、精神の方の眠れない、眠剤をもらって休むということがわかりました。眠れないことも少し体験が出来ました。

私は今から30年ほど前から知的障がい者の方とのつながりもあるのです。精神よりも知的の方とのつながりがあるのです。その人のお母さんは筋ジストロフィーです。息子さん

も筋ジストロフィーであることがわかり、お母さんは5年前に亡くなったのですが。私はお母さんの成年後見人になっています。

子供さんが知的障がい者なので、成年後見の問題で金沢の家庭裁判所に聞きに行ったことがあります。法律がまだ出来ていないので、国会の審議中で来年の4月に国会に通す予定ですと言われました。そのときに金沢にある成年後見をサポートするところに頼みました。

成年後見の保証人のことで役場へ行って手続きをしてもらいました。そのお母さんに「もうあまり来られない」と言いましたら、そのお母さんが死ぬ前に私の施設「野の花」に寄付してくれると言いました。そして「ありがとうございます」と言いました。

その後、年明けに亡くなってしまいました。突然、病院から電話がかかってきました。見舞いに行った帰りに七尾ぐらまで来た時に、電話がかかってきました。急に体調が急変したと。筋ジストロフィーは特に体調が急変しますからね。のどに出たらのどの筋肉がしまるからね。羽咋の方に着いたら「これから電気ショックをかける」と聞き、電気をかけたけれど、押水に着いた頃には亡くなりました。それでお葬式をしました。



青山出前喫茶：本田氏が利用者の紹介

それで、今度は子供さんの問題が出てきました。子供さんはA学園に入っていました。A学園に入って大腿骨の骨折でS病院へ入院

して手術をしました。その後、筋ジストロフィーが進んできているのでI病院へ入院しました。私もI病院へ月に1回面会に行っていました。その時も後見人の手続きをしていました。その途中に亡くなりました。朝5時に病院の先生から電話がかかってきたので、すぐに金沢へ走りました。それでお葬式をしま

した。

嶋田:「野の花」を立ち上げる時から、当事者が声を出して、主体だったということですね。郵便局においでる時から……。そして「野の花」の職員になられたのですね。

次号へ続く

私たち地域活動支援センター「ゆうの丘」の通所者・保護者・支援者職員関係者一同は作業環境の充実と向上に向けて製品の販売を行っています。是非ご協力とご理解のお願いいたします。

・特定非営利活動法人 NPO法人野の花
地域活動支援センター「ゆうの丘」
〒926-0014 七尾市矢田町ミ81番地2
TEL・FAX 0767-52-9630



クッキー

パウンドケーキ



**青山彩光苑
障害者週間イベント2008
講演会**



**板倉 美紀(志賀町出身
バルセロ十五輪競歩日本代表)**

「聞き手:大森 重宜(ロサンゼルス五輪陸上日本代表)」

交通事故によるケガをのりこえて、前向きに頑張ってきたこれまでの人生についてお聞きする予定です。

日 時:2008年12月6日(土)14:20~

場 所:〒926-0831

七尾市青山町ろ部22番 青山彩光苑

電 話:0767-57-3309

主 催:青山彩光苑 2008障害者週間実行委員会

みんなの広場

車いすで治療してくれる歯科

平井 誠一

お盆の休みに歯が取れたので、どこか車いすでも診てくれる歯医者さんがないだろうかと思い、思い当たるところへ行ってみました。もともと、昨年手術した石川県の金大病院で歯を治してもらったのですが、それが取れてしまいました。いつものリハビリ病院の帰りに車いすマークとスロープのついた歯医者さんがあったので、そこへ行ってみました。

車いす用の駐車場が一台分用意されており、降りるとスロープが玄関までついていました。そのまま受付まで段差がなく入って行きました。私は頸椎の手術をしているので、そのことを歯医者さんに伝え、ここで診てもらえるかどうかを聞きました。「いいですよ」と言われ、すぐ診てもらうことになりました。

最初は、「車いすに移動できますか？」と聞かれましたが、「私の車いすはリクライニングになります」ということでやってみせたところ、「このままで大丈夫ですね」と言われ、「しばらく待っていてください」と言って奥の診察室に入っていられました。

次に呼ばれ診察室に行くと、椅子が全くない席があり、そこに車いすのまま押して行かれました。この席は多分、車いす対応の席として使われているだろうというふうに思いました。実際のところはよくわかりませんが、多分病院の車いすに乗り換えてその車いすを固定して角度なりを変えられるようになっているのかなと思います。

さて、私の車いすの使い方を一通り歯医者さんに伝え、その上で角度を変えたり位置を変えたりしてもらいました。また、歯のレントゲンを撮るために歯医者さんの奥にあるレントゲン室まで押していってもらい、レントゲンを撮りました。わりと広い空間だったので車いすで楽に入れました。治療も割とうまいような感じがしました。

そして、最後にうがいをする時に「据え付けのうがいするところを使うことができますか？」と聞かれ、「首が曲がらないので使えません」と言ったら、「ならば別の物を用意します」と言われ、首を曲げずにうがいすることができました。

歯医者さんの対応としては、私に対して話しかけたりとか聞いたりとかされたので、そういう意味ではいいところだと思います。

(「自立生活支援センター富山」ブログ「りーぶる・ライフ」より)



福祉日記 9 「差別と法律」

悪徳福祉評論家

日本という国は、殺人を犯しても精神に異常がみつかり、無罪となってしまう。これは明らかにおかしいと思う。ずっと前にテレビで何人かの障がい者たちが差別について語っていた。それぞれ人によって、差別について考えが違うようだが、そもそも差別とはなんだろうか？

僕ら障がい者にとって、差別とはやはり普通の人間として、見てくれない又は扱われないことで、たとえば、健常者にできても障がい者にはできないだろうとか、障がい者は夜

の店には行かないからいいだろうとか、障がい者は健常者と違うという固定観念が差別といえるのではないだろうか？

障がい者だって、健常者と同じに仕事はしたいし、遊びにだって行きたいのである。たしかに何人かの手助けは必要だと思うけど、それでも僕ら障がい者は世の中に貢献したいはずだ。

昔とくらべて、障がい者は世の中に受け入れてられているが、それはわずか一部でまだまだ障がい者のことを拒否する面が多い。また僕たち障がいをもった人間はどことなく、邪魔者扱いされている部分もある。じゃ、そんな差別社会を無くすにはどうしたらいいだろうか？

それには障がい者のことを世の中に知ってもらうためには、僕ら障がい者が運動を通して、世の中に理解を求めることだと思う。大阪では、障がい者達が様々な運動や活動を通して、障がい者が障がい者を助けるといったことが行なわれている。昔みたいに障がい者が誰かの助けを求めるのではなくて、障がい者が困っている障がい者の相談にのり、助けるということがこれから障がい者にとって、最も重要なことかも知れない。そうしている度にいろんな人が集まり、次第に人の輪が広がって、障がい者に対して、関心を持つ人ができるのではないだろうか？差別してしまう人はどうしても差別をしてしまうものではある。先ほど、差別社会を無くすにはどうしたらいいのだろうかと書いたけれど、差別社会はなくならないと思う。結局、僕ら障がい者がどう差別社会で生き抜いていけばいいのか、考えなければならないと思う。それと、この国が障がい者に差別をしてしまう一番の原因は、法律ではないだろうか？

まず一つに冒頭に書いたが、日本という国

はおかしいと思う。精神に異常がある者が人殺しをしても無罪になるとは、どうみてもおかしいのではないだろうか？この前のテレビで精神障がい者についてのこともやっていて、精神障がいの男性が、人から「あんたら、いいよね。人殺しをしても無罪になって・・・」と云われたということが紹介されていた。たしかにこれは心無い人の嫌がらせの言葉に過ぎないが、果たしてどうだろうか？

もし当事者が精神障がい者に自分の大事な人を殺されたとき、仕方がないといって許せるだろうか？僕なら絶対に許せないと思う。むしろ無罪になった時、憎しみが込み上げて、そいつを殺してしまうかもしれない。

だから、精神鑑定で異常が発覚しても罰を受けなければならないと思うのである。精神に異常があってもなくても罪を犯したものは、罪人にはかわりないのだから。そうしなければ、罪を犯した者は精神異常者を偽り、罪から逃げる者もいると思う。結局、このことから精神障がい者がみんな同じと思われ、差別されてしまうものだ。今の法律を変えなくては、いつまでたっても差別というものが変わっていかないと思う。どんな人間であれ、罪を犯したら、罰を受けるのは当たり前だと思う。この変で、日本も法律に関して、見直してはどうだろうか？ただ介護や金銭面だけをケチるのではなく、犯罪とかも……。

ここで一つ、車いすに乗った僕が人を殺せると思いますか？たぶん、こう思うのではないだろうか「障がい者は絶対に罪を犯せない」と。「犯さない」と「犯せない」というのは、全く別ものだから。



= 読者企画・食べ物談話 =

『食の安全』を見直しましょう

管理栄養士・秋本 信子

今年の始まりの月は、中国産の冷凍ギョウザを食べた親子など10人が嘔吐や下痢を訴えるという事件で幕を開けました。そのうち5歳の女の子は重体、4人は重症と報じられ、日本では使用されていない有機リン系の農薬が、いつ・どこで・どのようにして混入したのかという解明を中国に求める一方、中国産のギョウザや中国で製造された冷凍食品を買わないという非買運動が起こりました。

考えてみれば、あのとき大量に回収された冷凍ギョウザなどは、どこで・どのような方法で廃棄されたのでしょうか。燃やされた？埋め立てられた？どちらにしても中国には送り返されていないようだが……

もっとも、ギョウザの嫌いな人や冷凍食品を買わない主義の人、自分で手作りする人には関係ない話だったわけだが、その後思わぬ展開をみせました。

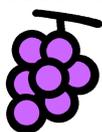
無事にオリンピックを開催し終えた中国は9月に入って早々に乳幼児用の粉ミルクにメラミンが混入していたとして回収を決定しました。すでに被害は中国だけで54,000人、腎臓結石を患う子どもは10,666人と発表されましたが、被害は地球規模にふくれあがり、中国製品のボイコットではすまされない事態になっています。

日本は、ここ1年間の中国からの牛乳・乳製品の輸入は 216トン。菓子（冷凍も含む）

の輸入は87,356トンありますが、乳製品を含むものがどの程度あるかは不明だそうです。また菓子以外で、原料に牛乳が使われている食品もあるため、誰もがメラミン入りの食品を何らかの形で食べてきた、と断定できるでしょう。

では、メラミンとはいったい何なのか？メラミンとは、科学的に合成された有機化合物で、原料の尿素は1828年に人間の手によって初めて無機化合物のみから合成された有機化合物として有名です。メラミン樹脂から製造された食器は、熱に強く、落とすときの衝撃にも強いだけでなく美しく彩色できるので病院などでも広く使われていますが、乳製品の量を増やすために混ぜて食べるなどという発想には、ただただあきれざるばかりです。

さらに、「メタミドホス」など農薬入りの汚染米が日本人を震え上がらせました。輸入事故米の流通は1996年頃から始まっているとされ、さらに12年が経過しています。どこに・どのように流通し、どのような加工がなされて私たちの口に運ばれたのか不明です。もっとも恐ろしいのはカビで、農薬よりも毒性の高い発ガン性物質「アフラトキシンB1」を含んだ汚染米の流通です。テレビでもカビの生えたお米が映し出されていましたが、このお米をそのまま、あるいは粉にして流通させるとは、日本人の一人として悲しくなります。猛毒であることを、はたして理解していたのでしょうか。愚かなことだと攻めるだけでは解決しない、人間の欲の果てしなさ、人間の業の深さをみるおもしろいのです。



「HSK季刊わたぼうし」のホームページ

<http://www3.nsknet.or.jp/~petero/> パソコン

<http://www3.nsknet.or.jp/~petero/i> 携帯・iモード



向とき子さんを偲んで

「HSK季刊わたぼうし」の表紙の水墨画を描き続けて

桶屋 善一

長い間、「HSK季刊わたぼうし」の表紙に宮田比路雪さんの川柳に水墨画を添えていただきました向とき子さんが9月5日の朝、永眠されました。心よりお悔やみ申し上げます。

私も「青山彩光苑」副理事長の神野錦子先生のご指導の下、水墨画クラブで学び何点か表紙に使用していました。しかし、私は途中で脱落し、何人かのクラブ員の方に表紙を担当していただきました。

向さんは事故で頸椎を損傷し、頸から下の自由を奪われ、口に筆をくわえて水墨画を描かれておられました。平成元年より七尾市の「青山彩光苑」に入所され、平成16年より穴水町に建った「青山彩光苑穴水ライフサポートセンター」に移られて生活をしておられました。

その彼女が当紙の表紙を担当するきっかけとなったのはクラブの時間に「わたぼうしの表紙に向さんの作品をお願いできませんか？」と聞きましたら、快く引き受けて下さいました。以来、宮田さんの川柳には向さんの水墨画が欠かせないものになっています。

数年前には向さんと宮田さんの作品で川柳カレンダーを作ろうという計画も出していましたが、諸事情があって実現がされませんでした。

そんな折、今年の7月に向さんから「これで表紙画をやめさせて」という手紙が届きビックリし、メールの交換で「せめて今年度だけはお願いします」ということで3枚の作品をいただきました。それが最後の作品となり、



筆を口にくわえて描く、在りし日の向さん

後3回は向さんのご好意を受けて掲載させていただきたいと思っております。

7月26日(土)に「青山彩光苑穴水ライフサポートセンター」の夏祭りに会いに行きましたが、体調を崩されて会えずに帰って来ました。7月31日に「元気になった」というメールが届いたので安心していましたが、9月5日(金)の午後、職員の方より「向さんが今朝亡くなられた」と聞かされ、驚き呆然としておりました。しばらくして落ち着いてから羽咋の事務局へ「向さんが亡くなった」ことを伝え、わたぼうし会より弔電を打っていただきました。

向さん、長い間「HSK季刊わたぼうし」の表紙を飾っていただき、ありがとうございました。これからも天国で素晴らしい水墨画を描き続けて下さい。

「HSK季刊わたぼうし」を支えていただいた方が亡くなり残念に思いますが、陰で応援して下さいの方々の期待に応えられるように頑張りたいと思っております。

最後に、向さんへの追悼文を書かせていただきました神野錦子さんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

故 向とき子さんへの追悼

青山彩光苑副理事長・神野 錦子

今年の夏は殊の外暑かった様に思われ、関与している身体障害者施設の入所の皆様も、さぞ辛い事とお察し致していました。九月に入り、冴え渡る虫の声が聞こえてきますと、秋の気配を覚える様になってまいりました。

そんな「時」、「青山彩光苑穴水ライフサポート」に御入所の、向とき子様のお思いがけない容体の知らせを頂き、急ぎ駆け付けましたが、意識はなく、お呼びしてもお返事もなき状態でした。

9月7日、珠洲市にて、御葬儀に参列し、理事長（主人）と共に合掌しながら、私の脳裏には、とき子さんとの20年の様々な事が走馬燈の様に駆けめぐってまいりました。

ときさんは、38才の時に、事故の為、頸髄損傷による四肢麻痺で、寝たきり、車いすの生活を余儀なくされ「K病院」を経て、「青山彩光苑」に入所されました。とても可愛いく美しい方でした。

当時、「彩光苑」の副苑長を致しておりました私は「何かお好きな事は？」とお伺いしました処、「若い頃より、絵を描く事が大好き」と云われ、私も少々、墨彩画をたしなんでおりましたので、御一緒にクラブを作る事となり、唯一残っている感覚…口に筆をくわえる事で、身近にある様々な物をどんどん描かれる様になりました。

勿論御主人の協力もあり、自力で描く為の道具だてなどしていただきますと、もう表情も生き生きと、お顔のつやも増してゆかれるのが、供に嬉しく、クラスの人数も増し、そのうち書道クラブも開講し、かな文字にも挑戦していただき、一茶、芭蕉等の春夏秋冬の

俳句と絵を組み合わせた『帖』も完成。

平成6年皇太子殿下御夫妻行啓の折、とき子さんの絵を描かれているお姿を御覧いただいた両殿下も深く感動されたのを思い出されます。いつでも前向きに生き甲斐を見つけられた、とき子さん。お手伝いさせていただいた私も幸せでした。

きっと天国でも、絵筆をとって、独特のソフトでさわやかな、あふれる情感のある絵を描いておられる事でしょう。

共生した20年の日々、本当に有難うございました。

合掌



向とき子さんの表紙作品集

「HSK季刊わたぼうし」No.71(2006年秋)



「HSK季刊わたぼうし」No.74(2007年夏)



「HSK季刊わたぼうし」No.72(2007年冬)



「HSK季刊わたぼうし」No.75(2007年秋)



「HSK季刊わたぼうし」No.73(2007年春)



「HSK季刊わたぼうし」No.76(2007年冬)



※せっかくの作品が白黒印刷でごめんなさい。
カラー印刷をご希望の方はメールをいただければ、添付ファイルにしてお送りします。

申し込みはzen@san9.netまで。

マイ・ブックルーム

手足のしびれ、歩きにくい症状がある方に

診療ガイドラインに基づいた
頸椎症性脊髄症ガイドブック

編集：日本整形外科学会診療ガイドライン委員会

頸椎症性脊髄症ガイドライン策定委員会

本体：¥1,200+税 発行：南江堂

手足のしびれ、頸の痛み、脳性麻痺の2次障害などで悩んでおられる方々にこの本をお勧めしたいと思います。

「頸椎症性脊髄症」とはどのような病気かの説明から始まり、症状の経過、病院への受診、診断、手術などの各項目は短い文章、大きな文字、フリガナ、解りやすい図解付きで、A4版、65ページ前後で専門書のように厚くなく、初心者でも読みやすくなっております。

主な目次は以下の通り

- ・頸椎と頸髓のしくみと働き
 - ・頸椎症性脊髄症の診断は？ 治療は？ など。
- インターネットの「アマゾン」からも購入可能。

年間協力会員募集中

この機関紙は障がいのある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しています。

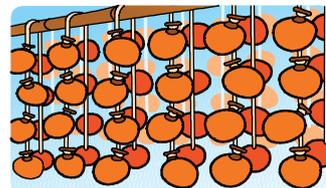
この会費で、在宅障がい者や福祉関係機関等に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、年間協力会費として扱っています。

年間協力会費：2,000円
会費振込先：郵便振替口座
振込先名義：わたぼうし連絡会
00750-6-9791

編集後記

秋の深まりを感じさせるこの頃ですが、いかがお過ごしでしょうか。お盆前後の異常な暑さがウソのように思え、木の葉が少しずつ黄色くなり、朝晩は寒くなってきました。もうすぐ白いものが降る季節がやってきますね。

最近福祉関係の人材不足がニュースになりつつあります。「3K+Y」汚い・きつい・臭い・安い悪条件が重なり、福祉・介護職員の確保、定着が望めない時代に、重度の障がい者はどのようにして生活・健康・生命を守り、自分らしい生き方を考えていくかが大切だと思います。皆さんの考えを聞かせていただければと思います。(Z.O)



川柳裏表紙

無人駅 誰が活けたか 菊の花

いつも「川柳裏表紙」をお書きになっている宮田比呂雪さんが体調不良のため、「川柳裏表紙」をお休みさせていただきます。

なお、表紙の川柳は宮田さんが自費出版されている「車椅子旅日記」より、著者の了解をいただき掲載させていただきました。

編集及び連絡先

連絡は zen@san9.net まで

定価 二〇〇円